

《論 説》

## 週末型ホームステイ実施方法の改善に向けて

廣 田 陽 子・岡 益 巳<sup>1</sup>

### 1. はじめに

岡 (2005) で述べたように、留学生教育の一環として留学生と地域社会との交流促進を図ることが重要である。専ら留学生問題を取り扱う月刊誌『留学交流』に1999年以降毎年「留学生と地域社会」にかかわる特集が組まれている事実がその重要性を裏付ける<sup>2</sup>。留学生と地域社会との交流は、地域の伝統行事への参加、バザー、シンポジウム、学校訪問、弁論大会など様々なタイプのものが考えられ、日本人家庭を訪問するホームステイもその1つである。

岡山大学国際センター(旧留学生センター)留学生相談室では、学外の留学生支援団体である「留学生支援ネットワーク・ピーチ」<sup>3</sup>との連携協力のもとに、2001年度から前期と後期に1回ずつ週末型のホームステイを実施しており、2008年度後期には第16回目を実施した。

ホームステイ制度創設時にはホストファミリーの確保が困難であったため、参加対象者を次の3種類の留学生に限定した。すなわち、①国費研究留学生として来日し、来日直後の半年間留学生センターの日本語研修コースで集中的に日本語・日本事情教育を受ける日本語研修生、②国費の日本語・日本文化研修留学生として来日し、1年間日本語科目を中心に勉強する学部レベルの学生、③日韓共同理工系学部留学生事業で来日し<sup>4</sup>、半年間留学生センターで日本語科目を中心に学部入学前予備教育を受ける学生である。これらの留学生は来日後2、3か月の時点でホームステイを体験することになる。

2005年度以降はEPOK制度および学部間交流協定に基づいて入学する交換留学生にも参加資格を拡大した<sup>5</sup>。さらに、2006年度には私費留学生が国際センターの日本語研修コースの履修が認められるようになったことを受けて、同コースの「日本事情」科目を履修する私費留学生にもホームステイ

<sup>1</sup> 岡山大学国際センター教授

<sup>2</sup> 『留学交流』は独立行政法人日本学生支援機構が編集する雑誌であり、2004年3月以前は財団法人日本国際教育協会が文部科学省の監修のもとに編集していた。

<sup>3</sup> 留学生支援ネットワーク・ピーチは、2001年に留学生のホームステイを企画実施することを目的として設立された団体である。設立の経緯等の詳細に関しては、岡(2005) p.37を参照願いたい。

<sup>4</sup> 当該留学生事業は2000年に始まり、2008年10月には9期生が来日した。日本政府と韓国政府が事業経費を折半するが、受入れに際しては国費留学生として取り扱う。本学での当該留学生の受入れ状況に関しては、岡(2007) pp.1-2を参照されたい。

<sup>5</sup> EPOKは、1995年に文部科学省によって創設された短期留学推進制度に基づく制度である。亀高(2004)によると、「岡山大学短期留学プログラム(以下EPOK)は制度として平成11年(1999年)に正式発足した(p.13)」

イ参加を認めることとした。しかし、在籍身分が研究生・大学院生である私費留学生の「日本事情」出席率が芳しくなかったため、2008年度後期には同留学生の「日本事情」科目履修およびホームステイ参加を認めない方針に転換した。

2007年4月1日付けで第1執筆者である廣田が国際センター留学生相談室の兼任教員に発令されたのを機に、週末型ホームステイの企画運営にかかわる業務の大半を第2執筆者の岡から引き継ぎ、今日に至っている。

## 2. 先行研究と本研究の目的

### 2.1 先行研究

我が国の高等教育機関に在籍する留学生の短期ホームステイに関する先行研究は極めて少ない<sup>6</sup>。

溝口(1995)は、「実際に日本人とのインターアクションを行わせることにより、学習の動機づけや意欲を高める(p.116)」などの5つの学習目標を設定し、日本語・日本事情教育の一環として日帰りの日本人家庭訪問を実施した事例報告である。参加留学生の日本語能力は中級から上級である。留学生に対するアンケート調査結果から、日本人家庭訪問で日本語・日本事情学習上の達成感が得られ、自信につながり、動機づけにもなったという結果が示されている。

鈴木(2000)は、佐伯(1995)の学習モデルである「学びのドーナツ理論」に依拠しつつ、短期ホームステイにおける留学生とホストファミリーの双方の学びに注目し、双方に対するアンケート調査結果に基づいて学びの特質を明らかにしようと試みた。異文化理解ができて良かったと感じているホストは半分弱であり、他方、留学生側もホスト以上に異文化理解よりも家族との交流そのものに意義を感じ取っていた。すなわち、学び手である「I」が直接接触している「YOU」を介在して「THEY」的世界を知る機会が意外に少なかったという興味深い報告をしている。

三間(2003)は、3日から10日間の短期間のホームステイ受け入れ家庭を調査対象とし、日本語教育の視点からホームステイの有効性を論じたものである。すなわち、受入れ留学生との接触を通じたホストファミリーの意識の変化に焦点をあて、留学生にどのような受入環境が提供されたかを分析し、留学生の日本語能力向上と異文化理解促進に有効であるホームステイを日本語教育の一環として位置づけることを提唱している。

佐々木・水野(1999)は、ホームステイのノウハウを示した概説書であるが、ホストファミリーに対する短期ホームステイのアドバイスとして「お互いの人間関係の距離を縮めるような活動をすることが大切(p.33)」と述べ、買い物・料理・趣味・スポーツなどを参加留学生といっしょに楽しむことを勧めている。

また、アジア学生文化協会(2002)は短期ホームステイの概説書であるが、ホストファミリーが受け入れる外国人とどのような交流を行えば良いかとの疑問に対して、「定番の答えはありません。結果として、お互いの交流が深まり、友情や親密な感情が生じれば、よい交流ができたということにな

<sup>6</sup> 主に長期ホームステイが日本語学習にもたらす効用について論じたものに牧野(1996)、鹿浦・武田(2000)、鹿浦(2007、2008)などがあるが、本研究は週末型ホームステイを扱うため、これらの研究には言及しないこととする。

るでしょう。』、「各人が各人のやり方で工夫をお願いします、としか言いようがありません。」と回答している。

これらの概説書から、短期ホームステイ受入期間中の交流方法に関する標準モデルは存在しないことが窺える。

岡(2005)は、岡山大学に在籍する日本語研修生を主な対象とした週末型ホームステイ実施上の問題点に関して論じたものである。岡(2005)は、2001年度前期から2004年度前期にかけて実施したホームステイについて、毎回のホームステイ終了直後に参加留学生およびホストファミリーを対象に実施したアンケート調査に加えて、2004年末にホストファミリーを対象としてホームステイ実施後の両者の交流実態を調査し、問題点を明らかにした。すなわち、①実施直前の受入留学生情報の不足、②参加留学生の当日の健康状態、③土産を持参することの是非、④受入中に観光地を訪れることの是非、⑤修了後の礼状の形態などに関する諸問題の存在が明らかになった。

廣田・岡(2008)は、地域社会における留学生交流支援のあり方を探ることを目的として、留学生支援ネットワーク・ピーチの交流支援活動を取り上げ、分析を試みたものであり、週末型ホームステイの問題点と改善策に関して考察を加えている。問題点は基本的に岡(2005)で指摘した5点と重複するが、廣田・岡(2008)では、ホームステイ実施当日の参加留学生の健康問題に関しては、新たな事例を紹介したうえで、基本的には臨機応変な対応が望まれることを示唆している。土産を持参することの是非に関しては、参加留学生に対してホストファミリー確定の連絡をする際に「母国の小さなプレゼント(例えば、絵はがき)があれば持って行きましょう。岡山でプレゼントを買う必要はありません。」とのコメントを付すことで高価な土産を持って行かないように指導していることが分かる。ホームステイ終了後の礼状については、パソコンの普及に伴う電子メールの利用が進んでおり、事後指導が容易になったことに言及している。また、ホームステイ参加対象留学生の増加に備えて、留学生支援ネットワーク・ピーチの加盟団体を増やし、ホストファミリー登録者数を増やすことの必要性についても論じている。

## 2.2 本研究の目的

本稿で扱う週末型ホームステイが短期ホームステイの一種であることは言うまでもない。佐々木・水野(1999)やアジア学生文化協会(2002)から短期ホームステイの受入交流の標準モデルを設定することは適切ではないことが分かった。

他方、岡(2005)や廣田・岡(2008)は、週末型ホームステイの実施に伴って幾つかの問題点が存在することをホストファミリーや参加留学生を対象としたアンケート調査結果によって明らかにしている。

本研究においては、2001年度から2008年度にかけて実施した週末型ホームステイを概観し、2004年度後期から2008年度後期の期間に参加した留学生およびホストファミリーを対象としたアンケート調査結果に現れた問題点を分析し、実施手順を含めた全般的な運営体制の見直しを提言したい。留学生30万人計画が追い風となり、本学においては今後交流協定に基づく交換留学生の受入が急増することが見込まれる。このため、ホームステイの実質的な企画運営部署である留学生相談室の立場か

ら、実施計画の立案から実施後のケアに至る一連の流れを整理・分析し、問題点の改善を図り、より良いホームステイの実施方法を確立することが焦眉の急となっている。本研究の成果は、本学における地域交流の促進と国際化の進展に寄与するであろう。

### 3. 週末型ホームステイの概要

#### 3.1 予備調査とマッチング

ホームステイ実施時期は、前期が7月初旬、後期が12月初旬の各々2回の週末である。参加対象者は、前期は日本語研修生とEPOKを含む交換留学生、後期にはさらに日本語・日本文化研修留学生と日韓共同理工系学部事業の予備教育学生が加わる。参加資格を有する留学生に対して、4月中旬、10月中旬にホームステイ参加希望の有無および次の項目に関する予備調査を実施する。記名式で、①希望するコース（1泊か日帰りか、第1週目か第2週目か）、②単独で訪問か友人と一緒に訪問か、後者の場合は友人名を明記、③食べられない物の有無、ある場合は具体的に、④飲酒の有無、⑤喫煙の有無、⑥ペットアレルギーの有無、⑦宗教、⑧メールアドレスと電話番号。以上の8項目に、名前、出身国、所属・身分、専門分野、日本語のレベルを加えて一覧表を作成する。ホームステイ実施の約1か月前の5月上旬、11月上旬までに留学生支援ネットワーク・ピーチ連絡会議を開催して、作成した一覧表を配布する。会議の場でマッチングできる部分は確定し、残りについては後日メールにて各NGOから個別留学生の引き受けを留学生相談室宛に連絡してもらい、先着順で受け付ける。留学生相談室はマッチングが確定するたびにピーチ連絡会議メンバー全員宛に報告を行い、同時に未確定留学生の情報も伝える。

#### 3.2 第1回から第16回ホームステイの実施概要

第1回（2001年度前期）から第16回（2008年度後期）にかけて、合計237人の留学生がホームステイに参加した。参加国留学生の在籍身分は表1のとおりである。前述のように2005年度からEPOKコースの学生が参加するようになり、参加人数の半分弱をEPOKコースの学生が占めることが多くなった。一方、ホストファミリーは、2008年度末現在で64家庭が岡山大学留学生相談室に登録している。原則として、登録者は留学生支援ネットワーク・ピーチに加盟している団体（＝NGO）のメンバーである。ネットワーク・ピーチ立ち上げ当初の所属団体は6団体であり、立ち上げ当初でホームステイ参加希望留学生数が多かった2001年度には、無所属の個人、岡山市国際交流協議会にホストファミリーとして登録している5家庭にも受け入れを依頼した。2006年より、準会員扱いで赤磐市国際交流協議会からも9家庭が登録しており、2007年からは新たに国際交流グループ「アルママータ」が正会員として参加している。登録家庭の数は増えているものの日程や留学生の希望、ホストファミリーの希望をマッチングさせることには依然として時間がかかり、20名前後の希望者がある場合は、希望留学生のリストを配布してから全員のステイ先を決定するまでに概ね1ヶ月を要している。

表 1 実施時期別・在籍身分別ホームステイ参加留学生

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	計
研修生	8	17	7	17	14	5	6	8	7	3	5	5	6	13	0	5	126
日韓生	0	5	0	5	0	4	0	4	0	2	0	6	0	1	0	1	28
日研生	0	2	1	1	0	3	0	1	0	2	0	1	0	2	0	2	15
交換生	—	—	—	—	—	—	—	—	2	11	4	12	5	11	2	13	60
その他	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0	3	3	0	0	0	0	6
合計	8	24	8	23	14	12	6	13	9	18	12	27	11	27	2	21	235

注1) 年2回実施。2001年前期(第1回)～2008年後期(第16回)

注2) 研修生=日本語研修生, 日韓生=日韓予備教育学生

注3) 交換留学生はEPOKコース留学生を含む。 その他=その他の私費外国人留学生

表 2 実施時期別・登録 NGO 別受け入れ留学生数

登録 NGO \ 回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	計
倉敷国際親善協会	4	10	6	15	10	6	2	7	6	8	5	8	5	9	0	10	111
おかやま女性国際交流会	0	2	1	3	2	3	2	4	1	4	1	5	2	3	0	1	34
ハンドインハンド岡山	2	0	0	2	0	2	0	0	1	2	1	2	0	4	2	3	21
岡山ユネスコ協会	0	0	1	1	2	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	7
アムネステイ岡山	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	2	1	1	0	0	8
留学生ボランティア・WAWA	1	2	0	1	0	1	1	2	1	2	1	4	2	2	0	1	21
岡山国際交流協議会	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
アルママータ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	0	3	6
赤磐市	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	6	1	5	0	2	18
無所属	—	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4
合計	8	24	8	23	14	12	6	13	9	18	12	27	11	27	2	21	235

注1) 赤磐市は2006年度前期から, アルママータは2007年度後期から参加。

#### 4. アンケート調査結果にみるホームステイの現状と問題点

##### 4.1 参加留学生に対するアンケート調査

###### 4.1.1 調査方法

ホームステイ終了後、「日本事情」の授業において、ホームステイに参加した学生に簡単なアンケートを配布している。授業中、あるいは授業終了後に回答してもらい、「日本事情」を担当している岡、あるいは副担当者に提出するよう指導し、実施後3週間くらいまでに回収するようにしている。本研究の調査対象者は第8回から第16回までの参加留学生140名である。

調査項目は、1. 選んだプラン（「日帰り」、「1泊」）、2. 楽しかったか（「とてもたのしかった」、「たのしかった」、「ふつう」、「あまりたのしくなった」、「まったくたのしくなかった」の5段階評価）、3. しょくじはたべられましたか（「はい」、「いいえ」）、4. どんないけんをしましたか（自由記述）の4項目と2006年度より、5. ホストファミリーへおれいのがみ（Eメール）をいただきましたか。（「は

い」「いいえ」、「はい」を選択した場合は「てがみ」、「Eメール」、「はがき」、「そのた（内容の記述）」を選択）の1項目を追加している。

#### 4.1.2 調査結果

参加学生のうち133名からアンケートを回収し、回収率は95.0%であった<sup>7</sup>。選択肢を選ぶ質問については全員が回答している。体験についての自由記述欄も、1行の感想のみを記したものから、2日間の体験を詳細に記述したり、ホストファミリーがいかに素晴らしかったかを丁寧に書いたりしたものまで様々であるが、回答した全員が記述しており、無回答はなかった<sup>8</sup>。

回答内容は以下のとおりである。

##### (1) 希望プラン

アンケートを提出した学生のうち、日帰りのビジットを希望した留学生は54人(40.6%)、1泊のステイを行った留学生は79人(59.4%)である。

##### (2) 満足度

「とても楽しかった」が109人(82.0%)、「楽しかった」が23人(17.3%)、「あまり楽しくなかった」を選んだものが1人(0.8%)いた。

##### (3) 食事

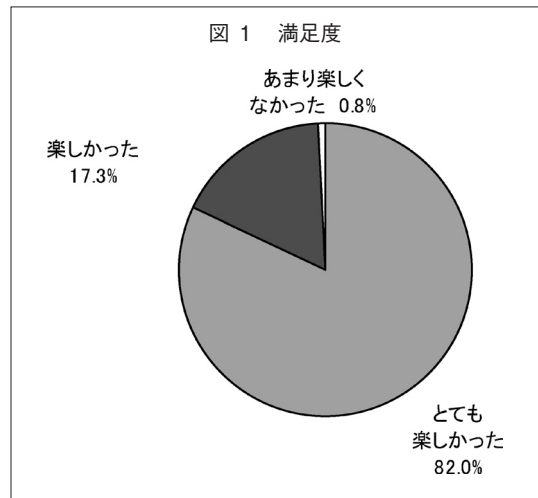
132人(99.2%)が「食べられた」と回答したが、そのうち1人は「デザートにアレルギーのある食材が含まれていたため、それだけ食べられなかった」と記している<sup>9</sup>。また、「食べられなかった」とした1人はドライブ中の山道で少し車酔いしたため、「食べられなかった」ということであった。

##### (4) どんな体験をしましたか。

「楽しかった。素晴らしい体験だった」という類の記述があったものが76人(57.1%)「ホストファミリーがとても親切であった。家族のように受け入れてくれた」などホストファミリーについての好印象を述べたものが45人(33.8%)あった。その他に記述されていた内容は以下のとおりである。

##### (a) コミュニケーション

「ホストファミリーと様々なトピックについて話すことができた」、「日本の伝統や文化について



<sup>7</sup> 回収できなかった7名のうち、2007年度前期に追加でホームステイを実施した2名については、実施時期が他の学生よりずれたためアンケートの回収に至らなかった。2004年度まではホームステイプログラムに参加する学生は日本語研修コースの学生が殆どであったため、「日本事情」とともに日本語研修コースの学生が履修する必修授業においてアンケートを回収することが可能であった。しかし、2005年度以降は参加学生が多様化したため、アンケートの回収は「日本事情」の授業を通じてのみとなり、回収を徹底することが困難となっている。

<sup>8</sup> 日本語での自由記述は39人、英語では92人。

<sup>9</sup> 事前に作成した留学生リストでこの留学生の食事に関する欄には「小豆・ナッツが不可」と記載されていた。デザートに具体的に何が含まれていたかは記述されていない。

て教えてもらえた」などホストファミリーとの会話から学ぶことが多かったとしたものが30人(22.6%)、自分の国について話しをしたと書いたものが6人(4.5%)あった。日本語をつかって会話したと書いたものは5人いた。「ホストファミリーは英語がしゃべれず、自分は日本語が少ししか話せなかったが、なんとか理解してもらえたようだ」と言語の違いを越えてコミュニケーションを図っていた姿が窺えるような記述もあった。

また、ホストファミリーだけでなく、その友人たちが親切であったとしたものが10人(22.6%)あり、ホストファミリー以外の人々と触れ合う機会があったことが良かったという記述もあった。

#### (b) 外出・観光

ホストファミリーと出かけた場所では、瀬戸大橋(14人)、神社・寺(9人)、美術館・博物館(9人)、岡山城(4人)、後楽園(2人)、小学校(4人)、図書館(1人)、テーマパーク(2人)、倉敷(10人)、牛窓(4人)、その他の地名をあげたもの<sup>10</sup>が8人、また、海(2人)、山(1人)、港(1人)であった。具体例はあげず、「いろいろ行った・観光した」という類の記述が14人あった。

#### (c) 体験

ホストファミリーとの体験も多岐にわたる。家庭での触れ合い体験としては、工芸品を一緒につくった(6人)、ホストファミリーの子どもと遊んだ(7人)、将棋などのゲーム(3人)、クリスマスツリーの飾り付け、年賀状作成、庭の果物摘み、おばあさんが歌を歌ってくれた、ピアノを弾いた、などがあった。

外出して体験したものとしては、パーティ(9人)、買い物(5人)、水泳(2人)があり、料理教室、英語クラス、みかん狩り、桃農園、クリスマスコンサート、ボートレース、キリンビール工場ツアーがそれぞれ1人であった。

特に日本的な体験としては、お風呂、温泉にいった(10人)、地域のお祭り(3人)、着物を着た(5人)、お餅つき(3人)、茶道(2人)、詩吟(1人)、三味線・琴(1人)、また、忍者をみた(1人)というものもあった。畳(和室)・布団を初めて経験したと書いたものが2人いた。

#### (d) 食事

食べ物、食事に関する記述も少なくなかった。「おいしいものをたくさん食べた。ホストマザーは料理が上手である」といった記述をしたものは21人(15.8%)、味に関する記述はなかったが「たくさん食べた」が2人いた。ホストファミリーと一緒に食べて食べた(12人)、また、細かく体験内容を書いていた留学生は、晩御飯を一緒に食べた(6人)、レストランでランチ(7人)など行動内容の一部としての記述があった。具体的な食事の内容としては、日本料理(15人)、お好み焼き・たこ焼き(8人)、バーベキュー(3人)、すき焼き(2人)、寿司屋(2人)、うどん、さしみ、おでんを食べたと書いたものがそれぞれ1人ずついた。自分の国の料理をつくったというものも2人いた。お好み焼きを食べたと書いた留学生のなかには、「広島風とエディンバラ風を作って食べた」とかなり独創的な料理を披露したものもいたようだ。

<sup>10</sup> 岡山県では児島、備前、鷲羽山、水島、日生、寄島、閑谷、兵庫県の赤穂など。

## (e) その他の感想

日本人の生活を知ることができた(10人)、日本の家庭・家族を経験できた(6人)、日本建築について学んだというものも1人いた。「日本人との触れ合いから学ぶことが必要だと気づいた」、「(海、山の景観を一望して)日本は本当に素晴らしい」など、大学生生活以外の日本に触れて湧き上がってきたと思われる感想もあった。

また、今後もホストファミリーと交流を続ける、続けたいと書いたものは7人(5.3%)、ホームステイプログラムがあれば再度参加するという留学生は6人いた。ホームステイプログラムへの要望としては、もう少し長くしてほしい(3人)、ホストマザー1人だったので家族が良かった(1人)などがあった。

否定的なコメントも若干であるがみられた。「会話を続けるのに気を遣って少しつまらなかった」、「疲れた、でも面白かった」、「ほとんど1人でテレビを観ていた。毛布を出し忘れたといっで午前4時頃に起こされた」などがあったが、どれも肯定的な記述と併記されており、悪印象だけが残ったというものではなかった<sup>11</sup>。

ホストへのお礼(7人)、プログラムの世話をしたコーディネーターやホームステイの機会を提供されたことへの礼(6人)を書いているものもあった。

## (5) ホストファミリーへのお礼

2006年より、留学生にはがき、電話、Eメールなどいずれかの手段でひと言お礼のメッセージをホストファミリーに伝えるように指導している(廣田・岡, 2008:144)。留学生向けのアンケートにも2006年前期から「ホストファミリーへおれいの手紙(Eメール)をだしましたか」という項目を追加し、「いいえ」にチェックをいれた留学生にはお礼をおくるように再度指導を行っている。以下の結果はその指導後にお礼をした学生も反映されている。2006年度以降でアンケートを提出した93人の参加者のうち、お礼をだしたと回答した学生は83人(89.2%)であり、そのうち手紙10人(10.8%)、Eメール53人(57.0%)、はがき14人(15.1%)、電話7人(7.5%)、年賀状4人(4.3%)、プレゼントや写真を送ったと回答したのも4人いた。最終的にお礼をだしたかどうか確認できていないものは10人(10.8%)であった。

## 4.2 ホストファミリーに対するアンケート調査結果

## 4.2.1 調査方法

ホームステイが終了して2, 3日後には礼状と簡単なアンケートを作成し、アンケートの返信用封筒も同封してホストファミリーに送付している。1, 2週間のうちにホストファミリーからアンケートが返送されてくる。本研究の対象期間である第8回から第16回まで、参加留学生140人分についてホストファミリーにアンケートを送付した。

アンケートの調査項目は、1. コース(「日帰り」、「泊2日」)、2. 留学生に対する全体的な印象(1)「a. 好感がもてた」、「b. 好感がもてなかった」、「c. どちらともいえない」の3段階評価、2) 1) で

<sup>11</sup> 前2者については、「楽しかったですか」という設問に「楽しかった」と回答しているが、最後のコメントを記した学生は食事内容にも少し問題があったため「あまり楽しくなかった」と回答している。



a. または b. と回答の方、その理由を具体的にお書き下さい、3. 留学生とのコミュニケーションはできましたか（「a. できた」、「b. だいたいできた」、「c. 半分くらいできた」、「d. 余りできなかった」、「e. できなかった」の5段階評価）、4. 留学生は何かプレゼントを持ってきましたか（「a. はい」、「b. いいえ」）、5. ホームステイ後に留学生から礼状（Eメールを含む）またはお礼の電話がありましたか（「a. はい」、「b. いいえ」、aであれば、「手紙」、「Eメール」、「電話」の選択肢から回答）、6. 留学生とどのように過ごしましたか。簡潔にお書きください。（簡単な記述例が記載してある自由記述）、7. その他、何かご意見がございましたらお書きください（自由記述）、の7項目である。項目5.は留学生のアンケートと同様、2006年度より追加された質問項目である。

#### 4.2.2 調査結果

第8回から第16回までの参加留学生140人分のうち、136人分についての回答がホストファミリーより郵送されてきた。回収率は97.1%である。このうち、一部の質問が未回答、あるいは回答が無効であったものが3人分あった。問題のあった質問項目の回答のみを無効とし、他の質問については有効回答としたため、質問項目によって母数が若干異なっている。

##### (1) コース

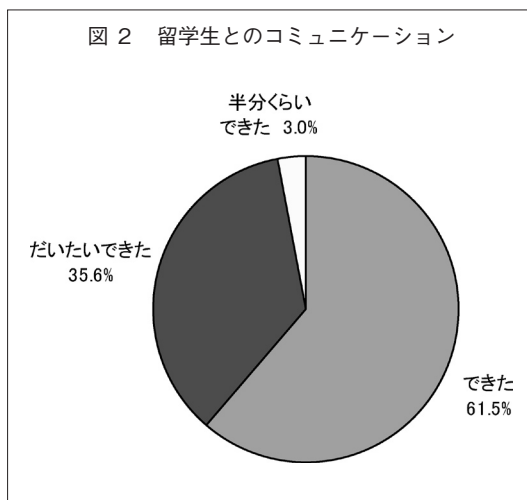
回答があった136人のうち、1泊2日の宿泊を含む受け入れを行ったものが83人（61.0%）、日帰りの受け入れが53人（39.0%）であった。

##### (2) 留学生に対する全体的な印象

留学生の印象について、有効回答135人<sup>12</sup>のうち、好感がもてるとされた学生は130人（96.3%）、どちらとも言えないは5人（3.7%）であった。好感がもたれた理由としては、「礼儀正しい、熱意が感じられる、積極的である、向上心がある、一所懸命日本語を話そうとしていた、明るい、素直、人柄が良い、真面目、笑顔が良い」などの記述があった。どちらとも言えないと回答したうえで、その理由として、「こちらの質問には答えてくれるが、向こうから積極的に話すということがなかった」、「カタコトでもいいのでもう少し積極的に日本語でコミュニケーションをとってほしいかった」との記述があった。また、「挨拶もきちんとでき穏やかでした」と書きながら、「どちらとも言えない」が選択されているものもあった。

##### (3) 留学生とのコミュニケーション

ホームステイを行った留学生140人のうち、103人（73.6%）は日本語初級者であり、日本語の学習をはじめて2、3ヶ月程度の留学生も少なくない。英語も日本語も初級会話レベルが



<sup>12</sup>無効回答1は「好感がもてる」と「どちらともいえない」の両方を選択したもの。

おぼつかないという学生もあり、実際にホストファミリーとコミュニケーションがとれたかどうかを尋ねている。有効回答 135 人のうち、83 人 (61.5%) が「できた」と回答しており、「だいたいできた」48 人 (35.6%)、「半分くらいできた」が 4 人 (3.0%) であった。「余りできなかった」、「できなかった」としたものはいなかった。

#### (4) お土産

岡 (2005) の調査において、留学生の土産は不要であるとの意向が複数のホストファミリーから寄せられた。前述したように 2006 年度から土産についての注意を書面で留学生に与えているが土産をもってきた学生は 113 人 (83.7%) であった。土産物の内容を付記した回答もあり、国の土産や自作の菓子などをもってきた学生が多かったが、なかには「岡山名物の『きびだんご』を持って来てくれました」、「たくさんの品物をもってきてくれました」など土産物に関する周知が行き渡っていないことを示す記述もあった。岡 (2005) の調査時と同様に「土産は必要ありません」とのコメントも見られた。

#### (5) 礼状

2006 年度前期より追加した項目に回答したものは 95 人であった<sup>13</sup>。お礼があったものが 68 人 (71.6%)、そのうち手紙を書いたもの 10 人、Eメール 48 人、電話 10 人、クリスマスカードや年賀状 3 人、プレゼントなどを送ったものが 4 人いた。Eメールと電話など複数の手段を用いて礼を述べたものも 5 人あった。ホストファミリーがアンケートを記入するまでの時期に礼がなかった学生は 27 人 (28.4%) であった。

#### (6) 受け入れ内容

具体的にどのように過ごしたかについて、特に観光や外出はせず、自宅で団らん、あるいは自宅周辺を散策して、ホストファミリーの日常生活の範囲で過ごしたものは 12 人であった。留学生を連れて外出した先としては、各種神社・仏閣 (27 人)、鷺羽山 (18 人)、瀬戸大橋 (18 人)、岡山城 (17 人)、倉敷美観地区 (17 人)、英会話クラスに参加 (18 人)、美術館・博物館 (12 人)、日生 (9 人)、寄島 (6 人)、牛窓 (5 人)、閑谷 (5 人) が挙げられる。その他の外出先については表 3 に示した。

表 3 ホストアンケートによる留学生の外出先 (3 人以下)

3 人	児島、備前、下津井、天文台、牧場、チボリ公園、沙美海岸、鯉のぼり工場見学
2 人	玉島、高梁、鴨方、牛窓オリーブ園、由加山、王子が岳、道の駅
1 人	岡山市内ドライブ、与島、玉野、渋川、総社、矢掛、足守、美星町 (中世夢が原)、観光農園、子どもの森公園、ドイツの森、三ツ山公園、ワイン工場、ビール工場、生涯学習センター、図書館、レンタルショップ、野崎邸、古墳、山陽放送、赤穂 (義士祭)、福山、香川、大阪

留学生の体験については、ショッピングモールやスーパーなどにホストと一緒に買い物に行ったものが 16 人、温泉 (11 人)、パーティへ参加 (18 人)、着物の着用 (5 人<sup>14</sup>)、民謡発表会・コンサー

<sup>13</sup> 未回答は 2 人であった。

トなどの鑑賞（5人）、大衆演劇・寸劇の鑑賞（4人）、お琴教室見学（4人）、餅つき（4人）、みかん狩り（3人）、詩吟鑑賞（3人）などである。その他の体験については表4に示した。

表4 ホストアンケートによる留学生の体験内容（2人以下）

2人	お茶会, カラオケ, 料理教室, 水泳, 記念植樹, 子どものソフトボール試合観戦
1人	テニス, 地域の祭 <small>しり</small> , ホストファーザーの小児歯科医院見学, コーラスグループの練習見学, マーチング大会見学, 蝦蛄取り見学, ステンドグラス展, 地域の公民館フェスティバル, 岡山女性交流会の会合に参加, 美容教室見学

ホストファミリー宅では家族との団らんのほか、ピアノ演奏を楽しむ（4人）、七宝焼き体験（4人）、将棋やゲーム（3人）、折り紙（2人）、押し花（1人）などをして家庭滞在を楽しんでいる。ファミリーの子どもたちと遊んだものは9人であった。

留学生自身が主体となって、パソコンや写真などを持参して自国の紹介を行った（4人）、自国の料理をつくってくれた（2人）、自国の珈琲の入れ方を教えてくれた（1人）などの記述があった。また、パソコンで年賀状作成を手伝ってくれた（1人）、留学生にパソコンを教えてもらった（1人）、卒論作成に協力してくれた（1人）、地域の廃品回収を手伝ってくれた（1人）とホストファミリーを助けて交流を深めていた例もあった。

ホストファミリー以外との交流については、他のホストファミリーと移動、観光、食事などを合同しておこなったものが12人あった。また、食事や団らんにホストの友人、親戚と一緒に加わったものが29人、外国人の友人や過去にホストファミリーの家に滞在した経験のある留学生などをわざわざ呼んだり、あるいは留学生と同国人の知り合いと一緒に訪ねたりしたものは14人あった。上記のパーティへ参加したなどを含めるとホストファミリー以外の人々と交流をする機会を得た留学生は少なくない。

なお、「病院（温泉でのぼせて転倒し足にけが）」、「（ホームステイの）前日食べた刺身の食あたりで吐き気をもよおしており、ドラッグストアで薬を購入」、「体調が良くなかったので早めに切り上げた」などのアクシデントや体調に関する記述もあった。

#### (7) その他の意見<sup>15</sup>

「楽しかった」、「留学生が喜んでくれたようで嬉しかった」などのコメントが32人あった。アンケートが記入された時点で既に留学生と再会しているホストファミリーや今後も連絡をとって交流を続けたいという希望を表明したコメントも含めて、24人が滞在した留学生と今後も交流を図りたいとしている。毎回留学生の受け入れを引き受けてくれているホストファミリーからは、留学生の大学での様子、留学生の抱えている不満や要望などの情報を提供してくれているものが16人あった。

今後のホームステイ実施にあたって検討すべきと考えられる意見には以下のようなものがあった。ホームステイ当日になって、留学生が別の予定をいれていることがわかり、予定を切り上げるなどの

<sup>14</sup> このほか岡山城に行った学生のうち14人がお殿様、お姫様の衣装の着付け体験をしている。

<sup>15</sup> 未記入、「特になし」は50人であった。

変更を余儀なくされたケースについて 6 人が記述している。「我が家への車中で 7 時に別のお宅でホームパーティに行くと言われ、それに合わせてこちらのスケジュールを調整しなければならなくなり、ちょっと困りました。日付は分かっていたのだから留学生に考慮してほしいと思った」、「クリスチャンで教会に（日曜の午前）10 時までに行くので早く帰ると言われ、驚いた」、「夕方からアルバイトがあるということで少々忙しかった」、「何かすることがあり、午後 2 時からにしてほしいと連絡があった」などである。

岡（2005）で指摘されていた留学生の健康管理については、「少し疲れ気味の様子」、「体調の悪さにもかかわらず『来たい』と言ってくれたことは嬉しかった」という記述があり、礼状についても「以前にも（書いたが）礼状は出すべき。日本の習慣と思ひ、その方がもっと深く付き合えると考えています」<sup>16</sup>などのコメントが今回もあった。

また、「これからもまた来たいと言っていました、どのように受け入れたらよいのか、スケジュールなどご指導をお願いします」、「また来るようにお伝え下さい」、「忘れ物がありますのでいつか取りに来られるように申し伝えていただけますか」など、コーディネーターに仲介を依頼するコメントも見受けられた。

## 5. 考 察

第 8 回から第 16 回までの参加留学生のアンケート結果から、参加留学生の 82% が「とても面白かった」、17% が「面白かった」と回答しており、岡（2005）の第 7 回までの調査結果（前者 80%、後 18%）とほぼ変わらない。また自由記述による回答では「楽しかった、素晴らしい体験をした」といった記述をしたものは、前回の 50% から、57% へ、「ホストファミリーがとても親切だった」といった感想は、27% から 34% へと増加しており、満足度は高まっていると考えられる。これは、第 8 回までの学生のほとんどが非英語圏からの留学生（岡、2005：38）であったのに対し、第 10 回以降は E P O K 制度による英語圏からの学生が増え、英語能力の高いホストファミリーとはより深いコミュニケーションが可能となったためではないかと考える。ホストファミリーで留学生とコミュニケーション「できた」「だいたいできた」としたものが 97% あり、また、そのなかでも「できた」としたホストファミリーが前回の調査よりも 4 ポイント増加していたといった点や留学生の自由記述から窺えるコミュニケーションに関する満足度からも総じて両者のコミュニケーションが円滑に行われたことが窺える。鹿浦・武田（2000）は長期ホームステイの留学生が英語を使用せず日本語のみで会話することを望んでいたと指摘しているが、今回の調査においては、留学生から「日本語を話してほしい」となどの要望はなかった。日本語能力の高い留学生は日本語でコミュニケーションを行っていたし、日本語能力の低い学生は短期ホームステイに日本語の習得を期待するよりも、日本人の生活や家庭を通じて日本を体験する、あるいは日本人とのコミュニケーションを体験すること自体に意義を見出していた。

<sup>16</sup> このホストファミリーはアンケートに記入した時点では礼状、電話などはなかったと回答しており、「希望はもっていたが」と付記されていた。

今回、初めて「あまり面白くなかった」と否定的な回答をしたものが1人あった。本人及びホストファミリーの自由記述から、いくつかの要因が重なったためであることが判明したが<sup>17</sup>、その中で今後改善が図れると思われるのは、留学生の食物アレルギーについてホストに十分伝わっていなかった点である。宗教上の理由や好き嫌い、アレルギーなどにより食べられないものについてはあらかじめ留学生のリストに記載し、ホストファミリーに伝わるようにしていることは前述した。しかし、毎回のことで注意が疎かになる場合も考えられる。今後はリストを配布する際に、食事、アルコール、ペットなどに関して、注意喚起を行うとともに、留学生情報が各ホストファミリーに行き渡るよう徹底したい。

ホストファミリーへのアンケートでは、96%の留学生が「好感がもてた」、4%が「どちらともいえない」と回答されており、「好感がもてなかった」とされたものはなかった。前回の岡の調査では全員の留学生が「好感がもてた」と評価されており、「どちらともいえない」と評価された学生はいなかった。ホストファミリーの記述から窺える要因としては言語能力の問題よりも、全く留学生からの働きかけがないなど留学生の積極性が問題となっている。佐々木・水野（1999）は語学の条件はホストと留学生のマッチングにおいて、それほど大きな影響があるわけではないとし、ホストファミリーの語学能力よりも「社交性や基本的におしゃべりなのか無口なのかといったコミュニケーションのパターンに注目した方がよい」と指摘している。これはホストファミリー同様に留学生においてもいえるのではないだろうか。留学生のコミュニケーションパターンに注目し、可能な範囲でマッチングの参考にしていくことも今後検討していきたい。

ホームステイの実施日については、実施日の勘違いなどにより、ホストファミリーが迎えに行ったにもかかわらず、予定どおりプログラムを実施できなかったといったケースが何度かあったため（岡、2005：40）、2007年より、実施日前日にコーディネーターがホストファミリー、留学生、付き添いの日本人学生<sup>18</sup>宛に待ち合わせ日時、場所、それぞれの連絡先、また緊急時の連絡先<sup>19</sup>を記載した確認メールを送っている。その後、待ち合わせに関する行き違いは1度発生したのみであった<sup>20</sup>。し

<sup>17</sup> 当該の留学生の自由記述から、不満を感じた点は3点あったことがわかる。1点めは受け入れ時にホストマザーしかいなかったために、1人にされていたことが多かったこと、2点めは、毛布を出し忘れていたホストマザーがそれに気づいて夜明けの4時ごろに毛布をもってきて、留学生を起したこと、3点めはアレルギーのために食べられないデザートがあったことである。1点めについては、ホストマザーが料理の準備などに専心していたため、留学生の相手をする時間が限られていたのだと思われる、また、2点めについてもエアコンがあるとはいえ、留学生が寒い思いをしているのではというホストマザーの気遣いのために生じたことであった。留学生は「あまり楽しくなかった」としながらも、「アレルギーのために食べられなかったデザート以外の食事は美味しかった」、「ホストマザーは親切な人だった」と記述している。

<sup>18</sup> JRなどを利用してホストと待ち合わせる場合、漢字の読めない日本語初級者については、待ち合わせ場所まで日本人学生の付き添いをつけるようにしている。付き添いは大学内の留学生支援ボランティアグループWAWAの学生に依頼している。

<sup>19</sup> 緊急の際の連絡先には廣田の携帯電話の番号を記載している。これまで実施当日に連絡があったのは、2007年度後期に留学生と待ち合わせた留学生会館の場所がわからないというホストファミリーからの連絡と、2008年度後期に待ち合わせ場所に留学生が来ないと付き添い学生からの連絡の2件である。

<sup>20</sup> ホストファミリーからの実施日変更についての情報が留学生に伝わっておらず、キャンセルされた日時に留学生がホストファミリーの出迎えを待っていたということがあった。これは実施日が予定よりも後に変更されたことで、実施日前日の確認メールでは防ぎきれない例であった。コーディネーターが変更について十分に関係者に確認を取る必要があった。

かし、ホストファミリーのアンケートから、実施日当日にホストと会った後、スケジュールの変更を申し出てホストファミリーを慌てさせたというケースが複数あることが明らかとなった。今後は週末という短期間のホームステイなので、なるべく実施日には予定をいれない、また、実施日に予定がはいた場合は速やかにホストファミリーかコーディネーターに連絡して実施日を変更するよう留学生には指導していく必要があると考える。ただし、これまで実施日については、2週連続した週末のどちらかという選択肢しかないため、週末にアルバイトや用事などが定期的に入っている留学生はその時間帯を除いてしかホームステイに参加できないことになる。加えて、実施日の選択肢が限られていることは、受け入れ可能なホストファミリーを探すことも困難にしている。今後は実施日の設定の仕方について、例えば一定期間内でホストファミリー側から実施可能日を提示してもらいマッチングを行うなどの方策を考えていきたい。また、現行の参加留学生の希望に合わせてホストファミリーを募る方法ではホストファミリー確定に時間がかかるので、実施可能日だけでなくその他のホストファミリーの受け入れ条件を提示してもらい、それに合わせて参加留学生を募る方法に変えることも考えられる。実施体制の変更も視野に入れて検討していきたい。

岡(2005)で指摘された参加留学生の体調については、体調不良の場合は当日であっても速やかにホストファミリーに連絡を取り、実施日を変更するようにと指導してきた(廣田・岡, 2008:143)。ファミリーへのアンケートに留学生が体調不良を訴えていたという記述が複数あったが、すべて2004年から2006年の間のものであった。指導が行き渡った成果であるのか、体調不良の学生がいなかっただけなのか判断しかねるが、今後は新型インフルエンザの蔓延も予想されることから体調に関する指導は今後も徹底しておく必要があると考える。

礼状については、やはり岡(2005)での指摘に基づいて、ホームステイ終了後の留学生になんらかの形でお礼の気持ちを伝えるように指導しているが、今回のアンケートの結果では、ホストファミリーがアンケートを記入した時点で礼状を出していた留学生は72%であり、ほぼ4人に1人が速やかにお礼を伝えていないことになる。ホストファミリーから郵送されてきたアンケート及び留学生のアンケートに基づいて、お礼を出していない留学生については直接指導を行っていることは既に述べたが、11%の学生については、礼状を出したという確認がとれていない。2008年末にはEPOK留学生の担当者であり、「日本事情」の授業の副担当者でもある教員から、「礼状を出すということについて認識がなかったので留学生に周知していなかった」という連絡があった。今後は担当者も含めて周知を徹底していきたい。

土産物に関しては、ホストファミリーのアンケートに素朴なもので嬉しかったという類の記述も見られるので、今後も、岡山で買う必要はない、国から持参したものがあれば持って行くという指導を継続して行いたい。

岡(2005)で考察の対象となった交流内容についてであるが、今回の調査では「どこか名所に行ったほうがいいでしょうか」という質問が1人から出たのみであった。「留学生支援ネットワーク・ピーチ」創設当初から参加しているホストファミリーはこれまでの経験に基づいて、留学生の希望に沿った場所や、留学生の喜びそうな定番の観光地へ「お出かけ」を行っている。しかし、単なる観光地めぐりに終始せず、一緒に出かけることや自宅での団らんを通じてコミュニケーションを深めている様

子がホストファミリー、参加留学生双方のアンケート記述から窺えた。また、それぞれのホストファミリーの経験や知識がピーチの定例連絡会議などを通して、他のホストファミリーへと共有されたり、あるいは初めてホームステイを引き受けるホストファミリーが他のホストファミリーと一部合同で交流を行うことでノウハウが共有されていたりするようである。こうした動きは、ホストファミリーへのオリエンテーションを行っていないために自発的に生じたものであるが、こうした自発的な取り組みを後押しし、経験の共有化を一層図るような仕組みについても考えていきたい。

経験を積み重ねていくホストファミリーとは対照的に授業で提供する週末型の短期ホームステイは留学生にとっては1度さりの継続性のない体験になってしまう可能性が高い。それにも拘らず、実施日に予定をいれたり、また留学生の消極的な態度がホストファミリーの意欲を損なったりすることで、有効にホームステイの機会を活用できないようなケースが見受けられる。溝口(1995)は受け入れ先を探させるところから留学生をホームステイプログラムにコミットさせ、家庭訪問中は会話の録音、訪問後はレポートの提出と日本語・日本事情の授業の一環としてホームステイプログラムを行っているが、対象は主に中～上級レベルの留学生であり、本学のように日本語初級者が大半をしめるプログラムにおいて導入可能なやり方であるとはいえない。あらかじめ「日本事情」の授業の中でホームステイに関するオリエンテーションを行うことも考えられるが、アンケート結果にも表れているように1日あるいは1泊2日という短時間の経験ではあるがその内容は多種多様であり、予め留学生に予備知識を与えすぎるとは留学生が体験する「生の」経験を先入観で損なってしまう可能性もある。現時点で考えられる方法としては、土産物、お礼について、また「ホストファミリーは留学生の積極的な態度を喜ぶ」など、キーポイントを書面で簡単に指示することなどがあるが、今後も日本語初級者である留学生の動機付けを高める有効な方策を検討していく必要がある。

## 6. 結 び

2001年度から始まった週末型ホームステイプログラムであるが、岡(2005)、廣田・岡(2008)を通して、実施運営の問題点を探り、改善を図ってきた。本研究においては、留学生の健康状態や土産の問題などこれまで浮き彫りにされた問題点については改善されつつあるが、お礼の問題は未だ十分に改善されておらず、また、実施計画における実施日の設定方法やホームステイ実施前の留学生の動機付けについて実施体制の変更も含めて新たに改善を図るべき点があることが明らかになった。

同時にアンケートからは短期間の交流ながら多様で多彩な交流が実践され、留学生の満足度も高いことがわかった。また、異文化接触によって新たな気づきや変化があったことがホストファミリーと留学生双方の記述から読み取れ、週末型ホームステイが、単発的な体験ではあるがその後のそれぞれの異文化交流に変化をもたらすものであったことが感じられる。また、ホストファミリーからはホストの経験を継続することによって深まる学びがあることも窺われた。しかし、こうした記述に関する分析は本研究では十分に行われていない。今後はホームステイプログラム実施における問題点の改善とともに、こうした留学生、ホストファミリーの学びや変化の質に着目して調査・分析を行い、双方にとってより意義深い短期ホームステイプログラムの在り方を探り、地域における国際交流の促進に

役立てたいと考える。

#### 参 考 文 献

- 廣田陽子・岡益巳（2008）「地域社会におけるサービス提供型の留学生交流支援－留学生支援ネットワーク・ビーチの交流支援活動を事例として－」『留学生交流・指導研究』第10号，pp.135-147.
- 亀高鉄雄（2004）「短期留学プログラムによる派遣業務に関する一考察－岡山大学4か年の実績を踏まえて－」『岡山大学留学生センター紀要』第11号，pp.13-30.
- 牧野成一（1996）「ホームステイにおける日本語学習効果」鎌田修・山内博之編『日本語教育・異文化間コミュニケーション－教室・ホームステイ・地域を結ぶもの－』，（財）北海道国際交流センター，pp.41-59.
- 三間美奈子（2003）「日本語教育におけるホームステイの有効性－長野市の事例をからめて－」『信大日本語教育研究』第3号，pp.33-45.
- 溝口博幸（1995）「インターアクション体験を通じた日本語・日本事情教育－“日本人家庭訪問”の場合－」『日本語教育』87号，pp.114-125.  
<https://soar-ir.shinshu-u.ac.jp/dspace/bitstream/10091/3009/1/Nihongo03-03.pdf>（2009年8月28日閲覧）
- 岡益巳（2005）「週末型ホームステイの実施とその問題点」『広島大学留学生教育』第9号，pp.37-53.
- 岡益巳（2007）「日韓共同理工系学部留学生の予備教育期間における留学生相談室の支援活動」『大学教育研究紀要』第3号，pp.1-14.
- 佐伯胖（1995）『「学ぶ」ということの意味』岩波書店
- 佐々木ひとみ・水野治久（1999）『ホームステイハンドブック－ホストファミリーと運営担当者のために－』JAFSAブックレット①，アルク.
- 鹿浦佳子（2007）「ホームステイにおける日本語学習の効用－ホームステイ，留学生，日本語教員の視点から－」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第17号，pp.61-112.
- 鹿浦佳子（2008）「ホームステイする学生は成績がいい！ホームステイをすると成績が上がる？」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第18号，pp.99-134.
- 鹿浦佳子・武田千恵子（2000）「ホームステイの功罪とホームステイプログラムへの提言」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第10号，pp.33-50.
- 鈴木潤吉（2000）「地域の国際交流での学びとは？－赤井川村での留学生ホームステイにおけるホストと留学生の反応から－」『北海道教育大学紀要』第55号，pp.115-124.  
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110000212756/en>（2009年8月28日閲覧）



## **For further improvements of the short-term homestay programme**

Yoko Hirota, Masumi Oka

In 2001, Advisor's Room in International Centre, Okayama University, initiated the short-term (one day or overnight) homestay programme. The aim of this paper is to improve the implementation process of the programme by reviewing the homestay between 2001 and 2008, especially focusing on the period 2004 – 2008 based on the survey of hosts and international students participating in the programme. A total of 133 students (a response rate 95%) and 136 hosts (a response rate 97%) responded to the survey.

The findings show a fairly high level of student satisfaction with the programme and a good level of communication between hosts and students. The survey results also suggest some problems identified in earlier studies by Hirota & Oka have been resolved. However, 25 percent of the students surveyed still did not write thank you notes to their hosts promptly while many hosts expected them to do. In addition, it was revealed that the passive attitude of some students discouraged their hosts from communicating with them. So the coordinator needs to encourage students to be active and make the most of the opportunity, and students' personalities can be taken into consideration at the time of matching students to hosts. Lastly, the current matching system also needs to be improved because a limited choice of dates undermined the success of the homestay. Under the current system, there are only four choices of dates which the coordinators arrange based on the university's schedule. Consequently several students have to choose a date even though they have something to do on that day and it also takes a long time to find available hosts. The current matching process is based on student's application including their choice of date and hosts choose which student to take in. So an alternative for more effective matching should be considered: hosts provide their information such as possible dates for stay, number of family members, their pets, and so on, and students choose which family to stay with based on their preference and convenience.